

実践報告

座敷童が生まれました

桂 三 発

第一章 同じ屋根の下で

両親と同じ屋根の下で、私の兄（長男）そして兄の子供達（甥・姪）の五人で生活をしています。この家は私の実家です。

この家には赤の他人が一人もいないのが特徴であります、その理由は兄の妻は姪が一歳の時に亡くなっています。甥、姪が小さい間は兄と私の母親が母親代わりになっていました。

私の家と実家は歩いて十分、車で三分くらいの距離でたまにですが実家では絶対に作らない手作りのハンバーグとかグラタンなどを甥や姪にそして両親に食べてもらうのに持っていきました。

甥や姪の遠足はもちろん、運動会になると私の家ではお昼の弁当を十人以上作ります。我が家族四人、実家五人そして京都（姉）の家族五人が来るからです。それはなぜかと言いますと兄が親子競技に参加しないということもあり、京都の姉やその家族が参加するために毎年来ていました。

姉は両親の世話も焼きにきていました、これは兄が甥や姪の学校の手続きや父親の介護保険の手続きなど面倒な事は姉に丸投げをしていたからです。

母親は父親と違い認知症とは無縁のように思っていました、姪が中学校を卒業直後から認知症が始まってきたような気がします。

父親の認知症は、はやくからはじめていたような気がしました。

第二章 父親の免許の返納

甥が中学校に行くようになった頃から、兄は甥や姪に御爺ちゃんの車に乗るのをやめるように言いました。

御爺ちゃんの運転は危ないからとのこと。そのとき兄が父親に運転免許証の返納を進めればよいのに何も言いませんでした。

そこで私が父親に運転免許の返納をするように言いますと「ハイ、返納します」とは言いません。

これが父親です。私は「父親に事故をしたらどうするんだ」と聞きますと父親は一言で「事故はしない、お前より運転はうまい」私は父親に「車ぶつけて傷が沢山ついているではないか」父親は「俺は五十年間事故した事は一度もない」私は「歳が歳やから事故する可能性もあるでしょう」と言いますと父親は屁理屈だけは認知症になっていても言います「若

くても事故はする」。「その通り」と私は父親に言いましたが、私は今、市議会議員をしています。「もし事故をしたら父親の名前より私の名前が新聞に載るから運転免許証を返納しましょう」と何度も何度も説得をしていました。

突然京都から姉が来まして私に「運転免許証を父親から取り上げてはいけない」と言います。

「今まで事故をしていない、だから事故はしない」と、姉は言いますが、私は姉に「今までは運が良く事故をしなかっただけで、歳を取ると事故をする確率も増えるでしょう」と言うと姉は「そんな事言ったら運が悪かったら誰でも事故はする」と言います。

私は姉に父親の使ってる車を見てみると、姉に車を見せ、私は「これだけあっちこっち凹み傷があるでしょう、だから危ないだろう」と言いますと姉は「歳を取ったら、これぐらいはぶつける、これぐらいはええねん」と言いました。

父親の免許証の返納は父親・姉の連合軍の反対でなかなかうまく返納できず、父親の説得を毎日続けました。

父親がM大学病院で理由は忘れましたが検査をしたのです。

第三章 父親精密検査で脳に腫瘍みつける

医者から脳に腫瘍がみつき車運転はしない方が良くと言われ、私はこれで免許証の返納ができると思ったら、また姉が免許証の更新だけはしないといけないと言う。

私は「車の運転をしないのに、何で免許証がいるのか」と姉に聞きますと姉は「身分証明証になるから」とのこと、「この歳になって何処で身分証明証がいるんですか」と姉に聞きますと「あったら便利やから」、「あったら車の運転をするぞ」と言うと姉は納得して、やっと父親の免許の返納をしたのです。ところが、今度は免許も無いのに父親が車の運転をするので、私は「免許証を返納したから運転したらアカン」といっても父親は運転をします。

最終手段で車のキーを隠し、三か月ぐらい運転しなくなったら父親も運転できなくなり一安心です。

第四章 姉と両親の旅行

姉と両親が年に一度か二度家族旅行に行っていました。私達家族はいつどこに行くのかわかりませんが、旅行から帰って来ると二、三日経過した頃、姪か甥から私に電話がかかります。おばあちゃんの調子が悪そうとのことですぐ実家に行くと言われ母親はぐったりしています。その時は大抵夜か日曜日です。私の妻は医療従事者ですから妻の働いている病院に電話かけてから連れて行き、だいたい入院になります。

母親が入院をすると父親を面会に連れていきます。父親は「なんで入院したんや」と聞くので「疲れたんやろ」と言うと父親は「仕事も何にもしてないのに」「先日姉と旅行に

行った疲れやろ」と言うと言は「俺は旅行に行かなかったから入院せんでよかった」と真顔で言います。姉と一緒に自分も旅行に行っているのに二、三日経つと忘れてる。

昼間、母親の面会をしているのに父親は夜になると母親に会いに行くと言いだします。兄は父親に「面会できない」と怒るだけです。何の解決にもなりません。父親の怒りマックスぐらいに甥か姪が私に連絡をしてくれます。電話で話を聞いてすぐに実家に行き、父親を車に乗せてとりあえず町内を走ります。

父親に「今から病院に行くけどもう夜遅いから病院終わってるかもわからんよ」と父親に言い聞かせその後父親に「お母さん何処に入院したかなー」と聞くと「〇〇病院」とちゃんと答えるんです。私が「〇〇病院、場所わかる」と聞くと「夜は暗いで解らん、S市やS市にある」「そやなー」と答え、父親に「何処に行こう」と聞くと父親は「◇◇（母親の名）とこやないか」その後「お母さん何処に入院しているかなー」と父親に聞き、父親が「〇〇病院」エンドレスに一、二時間運転しながら会話を続けてますと、「おしっこがしたい」と言うたら家に戻りトイレに行かせ寝かせます。

認知症のお年寄り基本的には怒ったらダメ、気長に『繰り返しの笑い』だと思ひ同じ事を聞いて、のらりくらりするのがコツと思ひ対応をしています。

また別の機会、姉が両親と福島旅行に行くと言ひたので姉に「連れていくな」と言ひました。姉は「元気な時に旅行に行かんと何処にもいけな」と、私は姉に「旅行に行くたびに疲れたと言ひて入院するんだ」と言ひて姉は「今度の旅行は楽な旅行やから」私は「何で移動するんだ」と聞きますと姉は「自家用車」と言ひて「どこが楽な旅行なんや」と言ひて姉は「休み休みで行くから大丈夫」と。旅行から帰ってきたら、結局、お約束で母親は入院となった。姉はもう一つ何年も前から母親を大阪の病院に連れていってます。姉に処方箋だけ教えてもらえたらこちらで病院は探すと言ひましたが聞き入れてもらえず。

晩年はその大阪の病院も行かずに、病は気からだと思ひ出来事の一つと姉の自己満足の考えでいつも振り回されるのが私と妻です。

第五章 母親が少しずつ壊れてきた

母親は認知症と無縁だと私達家族そしてその周りも思ひていたと思ひます。最初は頼まれた物を買ひてレシート渡せばすぐに現金が来たのに、姪が高校に通うようになった頃から現金が戻ってこなくなり認知症が始まったと思ひます。私と妻はこの頃の母親のおかしな行動に気づいていました。たとえばお皿がアルミホイルでぐるぐる巻きになっていたり、下駄箱にお鍋が入っていたりトイレットペーパーが冷蔵庫に入っていたり包丁がラップでぐるぐる巻きになっていたりです。そのころからご飯を食べなくなり甘いお菓子などを食べるので栄養不足で入院をする事が増えました。その度にかかりつけの病院（妻の勤めている病院）に入院です。

姉に私が「母親は認知症だと思ひ」と言ひて姉は「全然普通や、ボケていない」たまに

しか来ないからわからないんだと私は思います。甥と姪に「最近お婆ちゃんどう」と聞きますと最近物忘れがひどくなってきたとの事で、それを聞いても「マダラボケやから治るから心配せんで良いのだ」と。私は心の中で治るはずはない、姉に何を言っても無理だとこの時もまた改めて思いました。

ある時、姉から妻に両親へのご飯の用意を頼まれ、この時から朝昼晩のご飯を運びました。

第六章 デイサービスの隙間

両親に食事を運ぶようになり私達にもメリットもありました。一つ目は私の料理がうまくなったこと、私の妻が遅番の時は私が晩御飯を作らなければならない状態になったからです。娘にもお手伝いをさせ娘達もこの時期料理を覚える事が出来たのは我が家族の最大のメリットであったと思います。お昼は私が簡単なうどんとかピラフをデイサービスの隙間（デイサービスに通わない日）の時に作りに行きました。

晩御飯も施設で食べる事にサービスを変更したら、両親のお迎えを担当する事になりました。その時、一つ疑問が出てきた。なぜ父親はS町の施設を利用するのか、実家から車で五分ぐらいの所に施設があるのにもと思い、私はケアマネに聞きますと近くの施設に通えるとのことであった。明日にでも施設の移動をお願いしたのですが、一か月ぐらい時間を下さいとのことでした。

姉が実家に来た時に私は「なぜS町の施設にしたのか」姉は「近くだと歩いて家に帰るといかんから」私はもし施設を飛び出しても家に戻れる方が良いのではないかと思います。姉の考えは時々理解できない事があります。デイサービス施設を実家から三分ぐらいの所に変更してからは朝も施設に私が送る生活が始まりました。

第七章 朝のルーティーン

毎日朝食を食べたら施設に送るのですが、ある時から父親が毎日同じ事を聞くようになり、まず初めに「〇〇（父親の従弟）はどうしていますか」と聞くので私は「もう死んだ」と答えると父親は「今からお参りに行く」私は「誰もおらん」と言うと今度は「葬式に行ったか？」と聞かれるので私が「参列しました」と言うと父親は「よう参列してくれた」と言います。この時私は〇〇さんの通夜、告別式は父親と一緒に参列していたのに、参列したことも忘れていたのだと思いました。

父親「〇〇は早かったなー」「俺はまだ生きとるなー」この時、父親は誰としゃべっているのか、その後「△△（父親より一つ年上の隣の人）さんはどうした」私は「元気にしてもらうと思う」と言うと「最近顔みやんなー」と言うので「施設にでも行ってるのと違いますか」父親は「どこの施設や」、「私は知らん」と言うと父親は「△△より一つ下や△△は長生きやなー」「◎◎（町会議員毎回落選した人）、どうした」私は「この人もとっくに死で

る」と言うと父親は私に向かって「三発いま議員か?」「議員しています」と言うと父親は「いつからしているのや」私は「前からしてる」と言うと「◎◎は一回でも議員したんか」私は「◎◎さんは一度も選挙勝ってない」と言うと父親は「議員なれたのは俺のおかげや」と言います。

今度は「勘の助、知っているか」、私のお爺さんですから「知ってる」と言うと「アンナ人間はおらん」と「俺を小学校の時から仕事させて学校にも行かさん」とだんだん興奮をしてくるんです。ちんちん(怒りが沸騰)になる前に車に乗せて施設に送っていきます。両親を施設に送る事で朝の時間が楽になりました。「送り」を待っているときは施設に持っていくカバンがなくなる時があるのでそのカバンを探さなくてもよくなったのがメリットです。

第八章 ある日の夜

甥が姪から電話がかかり「お爺さんが□□(父親の弟の家に)さん宅におる」と電話が入り私は急いでいきますと既に父親は怒っています。その前になぜ父親が□□さんの家に行ったか、夜、突然□□さんの家に用事があるという父親の言葉を信じた兄はその家まで送ったのがそもそもの間違いである。母親の入院の時、遅い時間に面会行くといいだす父親ですから、父親を□□さん宅に連れていったのが最大の間違いで、もう一つ父親が怒る前に呼んでくれと兄に対して思いました。

私はまず父親に言います「もう遅いからそろそろ帰ろうか」父親は子供のように「まだおる、話が終わっていない」側におる兄はまた怒る、私は兄に「兄ちゃんは帰って」と言います。父親の話聞く。父親は「この家は俺が建てたんや」私は「そうですね」としか言えません。その当時の事は私はわかりませんので父親は「この家建てる時も銀行からお金借りて建てたんやわかるとるか」。□□さんも「兄貴が借りたけどお金を返したのは私や」父親は「何を言っとるか」と怒りだす。「お前は先祖の名前を名乗らんとお前は養子や」私は□□おじさんに父親の言う事に「口答えはしないで」とお願いする。父親は昔の事を何度も何度も繰り返す言い、□□おじさんも居眠りをしだしたら父親は寝るといいだし、私は今がチャンスと思い父親に「家帰って寝ようか」と言うと父親は「ここで寝る」と言うので布団を引いて父親が寝たのを確認して帰りました。

次の日、妻と一緒に父親を迎えに行く父親は笑顔でにこにこしながら「家に帰ろうか」昨日の夜の騒動はなんだったのか?と思うほど落ち着いていた。

甥と姪に御爺ちゃんがどこどこに連れてけと言うたらすぐに私に連絡するように伝え、□□おじさんには昨日の事を謝りに行きました、□□おじさんは「兄貴も苦勞したでなー、兄貴も学校に行けてたらもっと出世しとったのに」と言ってくれました、その後□□おじさんに玄関の門だけ閉めてもらえないか頼みました。門が閉まっていたら父親も家が留守だと思いきらめますからと。その事件を忘れた頃、実家から電話があり、実家に行くと父

親が「□□所に連れて行け」と言うので私は「車で行きましょう」と父親を車に乗せて□□おじさん宅に行く。玄関の門が締まっている。父親は「何で門が締まっている」と聞くので私は父親に「門が締まっているから旅行にでも行ったのと違いますか」父親は満足して実家に帰ってくれました。家に着くと必ず母親が「はよ寝な。皆に迷惑かかる早くねー」父親はぶつぶつ言いながら布団の中へ。またある時は▽▽（STに住むおじさん）所に連れていけ甥も姪も経験値ができすぐに私に連絡が入る。父親に「どうしたんですか」と聞きますと「▽▽の所につれてけ」私は父親に「▽▽おじさんの家何処ですか」と聞くと父親は「□□の家の前やないか」その場所には家はありません。父親は何十年前にSTに引っ越ししたことをすでに忘れています。

私はいつものように車に乗せ元家のある場所に連れていきます。□□おじさんの家は門が締まっています。道を挟んだ前は家がありません。何十年も前に壊してますから父親は「ここに何で家が無いんや、お前隠したか」私は「隠していない」と、「この道が広くなった時に家が売れて引っ越ししたの」と答えると父親は「お前いくらで売れたか知っとるか」私は「知りません」と、すると父親は「▽▽は何処におる」私は「知りません」と言う。父親は「▽▽は水臭い、アンナ人間になるなよ、俺は長男や、俺に何にも言わんと。この土地は先祖の土地や誰に売ったんや」私は「道の分だけ売ったんや」。父親は「誰に売ったんや」同じ事をエンドレスに。家に帰ろうの一言か、しょんべがしたい一言で実家に連れて帰ります。母親が「何処に行つとるの早く寝ろ、皆に迷惑かかるから」そして布団の中に甥と姪に「鍵だけはチャンとしない。御爺ちゃん、夜家を出たら大変やから」と常に言いました。

第九章 GPS

私は両親の徘徊が気になり、対策をいろいろ考えました。まず中から鍵をかける、万が一の事を考えてGPSを何処かにつける事を考えました。まず靴に付ける事を考えましたが靴を履くように言わないと履かない。黙っていると履かないからダメ。カバンに付けるのはどうか。カバンを持つ癖が無いからこれも無理。首からお守りとして持たすのはどうか。肩がコルと言いはずすだろう。体にGPSを埋め込むしかないんじゃないかと思う。私はシールで張れてなかなか剥がれないGPSの装着方法を考えたらお金儲けができるのではないかと考えました。そのくらい、認知症のある人の家族は困っていると思いました。

第十章 母親の入れ歯事件

朝食をいつもの様に運ぶと母親の顔がいつもとちがうんです、母親に口を開けてと言うと口の中の入れ歯が無いのです。私は母親に「入れ歯どうしたの」と聞きますと母親は「食べました」と言う。甥と姪に「昨日おばあちゃんの口に入れ歯あった」と聞くと「覚えていない」と言われ、すぐにかかりつけ病院へ行きレントゲンを撮ってもらいました。撮る

前から入れ歯は食べてないと思っていましたが、体の中には無く一安心をしました。

その足で歯医者に行き入れ歯作りに取り掛かりました。歯形をとってから数日経ってから施設から入れ歯が見つかったと連絡がきました。施設の方に何処で見つかったのかと尋ねますと、ハンドクリームの中のクリームの中から出てきたそうです。

認知症のある人は、悪意はないのはわかっているけれども我々の考えのつかない行動をするのです。

第十一章 京都の姉が両親を

姉から両親を私が面倒を見ると提案があり、私は何で両親の面倒を見ようと思うのか聞きますと、姉は「私が面倒みやんとアカンねん」と言いますので私は姉に「ヤメトケ」と言いました。

姉は「お母ちゃんは人見知りやから、知り合いがオランほうがきいつかわん（気を遣わなくて）で良い」と言います。その時も私は両親を引き取るのをやめるように説得しましたが聞く耳をもってくれませんでした。

両親を京都に連れて行った日に私は、すべての書類など京都の姉の所におくりました。

二週間ぐらいした時、京都の姉から電話が入りました。夜の八時ぐらいだったと思います。母親が塗り薬のキンカンを飲んだと電話がありました。姉は「T市の病院に連れて行ってほしい。今からI市のマクドナルドに連れて来て」という内容でした。その時心の中で猫の子やないぞと怒りが湧いてきました。母親と合流してかかりつけの病院つれていき胃洗浄などをしてもらいました。

次の日にキンカンの容器を見たとき、この容器をどうしたら蓋が外せるのか、と疑問であり未だに私の中の七不思議です。その後かかりつけの夜間外来で治療をしてもらい母親は長年住み慣れた家で住む事になりました。

第十二章 最後の入院生活

両親とも同じ施設に通うようになり、週に何日かは施設の泊まりもあり、隙間の日だけ朝食を両親に運び、泊りの日以外も甥・姪が施設のお迎えも手伝っていました。

朝六時前に「おばちゃんがない」と甥っ子から電話が入り、私と妻は朝食の準備をしていました。外から鍵をして中からは鍵がないとあかないようにしてあるのにどうして母親は家をでたのか？

三月末、朝はまだ寒く家の周りを家族で探し、一時間ぐらいで母親を発見し私の車に乗せました。

私の妻が母親の体温を測ると低体温になっていました。体を温めなければ車の暖房をマックスに毛布を掛けていても体温が上がる様子もないので、妻が救急車を呼びそのまま入院になりました。

後でわかった事ですが兄が鍵をかけ忘れ母親がトイレに行き用をたした後、布団に戻ろうとして外に出たとの事でした。

今までの入院は付き添い無しでよかったです、今回の入院は母親の付き添いありの入院になり、私が月曜日から金曜日まで、土曜日と日曜日は甥と姪に付き添いしてもらいました。

入院初日の夜、突然母親が「窓から人が入ってくる、窓を閉めて」それを聞いた時むちゃ怖くなりその夜は一睡もできませんでした。

母親は、毎晩毎晩幻覚をみては私に話かけてくる。それが怖くて、しかし、人間は不思議なもので慣れてくれば母親と会話をするようになりました。私の知ってる死んだ人が毎日、日替わりででてきました。一例をあげると、母親が私に「てるよし（わたしの名）口髭生やした老人がおる、あれ誰やろ」私は「堪ノ助御爺ちゃん」と答えると母親は「てるよし、堪ノ助さんや」とか、他にはお母さんの弟の大阪のおじさんもでてきました、毎晩こんな感じで始まります。

「てるよし、三味線弾いてるあれだれやろ」私が「大阪のおじさんかな」と答えると母親は「むっちゃんやーてるよし、むっちゃんや、あそこに犬がおる」私は犬だけはわからず。なぜかと言いますと私が小さい時から犬は何回も飼ってましたのでわかりませんでした。

母親が亡くなり葬儀が終わった時、私の家で飼っていた犬も二か月ぐらい二日に一度点滴を打ちに行っておりまして、母親の葬儀の時だけ獣医院で入院させていました。その犬が亡くなったと電話があり、母親が見ていたのは私の家の犬でした。

話は前後しますが、母親の施設が決まるまで一時的に療養病棟に移り、晩御飯の時だけ母親の所に行っていました。

Gロードで窓を開けながらたばこを吸っていたら、車いすの駐車できるカードが窓から飛んでいきその三日後に母親は亡くなりました。

第十三章 今も父親の介護は

父親も一時弱っていましたが、完全入所になってから認知症はありますが、昔より今の方が元気になってきたような気がします。

父親、母親の介護の経験が今も役に立っています。

今現在、父親の従弟の人の介護のお手伝いをしています、子供のいない人などで私がいろいろと世話をさせてもらいました。